埼玉県青少年健全育成審議会 議事録要旨

日　　時	平成２６年６月９日（月） 午前１０時００分から１１時５５分
場　　所	埼玉会館　５Ｃ会議室
出席者数	１１名
出席委員	明石委員、東谷委員、諸井委員、伊藤委員、長田委員、 川島委員、関根(由)委員、橋本委員、中村委員、志賀委員、久本委員
欠席委員	関根(正)委員、吉川委員
諮問事項 その他	１　埼玉県青少年健全育成審議会について ２　埼玉県のいじめ防止対策推進法への対応状況について ３　いじめ問題の重大事態に関する再調査部会の運用について ４　地域における青少年の体験活動の促進に関する方策の検討について

１　開　会

２　あいさつ
　福島県民生活部長

３　議事録署名委員の指名
　志賀委員、久本委員

４　議事要旨
（１）議事（１）埼玉県青少年健全育成審議会について
　事務局から資料１に基づき説明し、委員からは質疑等はなかった。

（２）議事（２）埼玉県のいじめ防止対策推進法への対応状況について
　事務局から資料２－１から２－４に基づき説明し、委員から次のとおり質疑等があった。

（明石会長）
　学校いじめ防止基本方針といじめ防止対策の組織について、県立学校はすべて策定・設置しているが、私立学校は検討中のところが多い。こちらの所管は教育局ではなく知事部局で扱っているのか。

（事務局）
　私立学校については知事部局の総務部が所管している。先月いじめ問題対策会議を開催したが、そこでも法律に基づいた早急な対応の必要性を意見としていただいているので、改めて総務部から私立学校に対し、早急に基本方針の策定と組織の設置について対応するよう、指導をさせていただいているところである。

（明石会長）
　私立はややもすると身内で解決しがちである。良い法律ができたので、ぜひ総務部から私立での設置についてお願いしてほしい。私立も設置をすると意識がはっきりする。

（事務局）
　この法律は、公立・私立に関わらず義務的な設置なので、早急に設置するよう改めて総務部へ話をしたい。

（明石会長）
　市町村立学校の学校いじめ防止基本方針を８月までに策定するところが６

０校ある。埼玉県の７％程度である。中学校は２４校ある。たいてい小学校も中学校も６～７％の学校が後手後手に回っている。ここが気になるところである。こういう学校は地域でいうとどのブロックで多いのか。

（事務局）

確認したところ、南部の人口の多い都市の学校に集中している。一部の学校は、市の方針ができていないためそれを待っているところだが学校でのたたき台は準備をしているとの回答や、慎重な手続きをしていて地域のＰＴＡの方などに意見をたまわっている、新年度の新体制になってから意見をうかがっている、などで少し時間がかかっていると聞いている。

一番心配しているのは重大事態が起きた時に対処が遅れることだが、その点について確認したところ、学校の既存の組織に必要な第三者をすぐに入れて対応する準備が整っているとの回答をすべての学校から得ている。

（諸井委員）

私立でいじめが起きたときに、組織を設置している、していないに関わらず、また設置したとしても設置すれば全部それがクリアになるということではない。過去に何度も子供や親御さんから相談を受けているが、私立の場合、問題が露見しない。それが表に出るということは、学校のイメージを傷つけるため、学校関係者としては出したくない、その前にもみ消してしまいたいという気持ちがあるから、疑いがあれば、退学とすることも理事会等ですぐにできる。そのように終わりになっている場合がほとんどである。義務で設置したとしても、それでよかったということではなく、どのように担保するのか、いじめをどのようにオープンにするのか、私立でいじめられようが公立でいじめられようが一緒なので、それをどう守っていくのか。

（事務局）

この法では、重大事態が起きた場合、公立学校、私立学校とも各学校においていじめ防止対策組織の中で重大事態の調査を行い事実関係の確認とそれへの対処、再発防止策を決めることになる。県立学校と私立学校についてはその結果は知事に報告することになる。その結果、もう少ししっかり対処すべきとなった場合は、再調査部会にかけるということになる。私立学校と公立学校は、法律上は同様な形で再調査を行うことになる。私立学校でクローズされてしまうような事案についても、再調査を行うという形に法律上はなっている。ただお話のように、私学ブランドというものを確保したいという思いで、公立の流れに沿った形で対応することを躊躇する部分もあるかもしれないというお話をいただいたので、総務部に事情を確認し、御指摘を伝え、その対応についても検討をお願いしたいと思う。

（事務局）
　私立学校においても重大事態が起きたときは知事まで報告することが法律上の義務になっている。その点について私立学校に周知するため昨年度、公立学校の説明会に私立学校も呼んで一緒に説明した。引き続き周知に努めてまいりたい。
　また、新たにいじめの支援員を設置し、重大事態が発生した場合、私立学校も含めて職員を派遣することとしているので、隠ぺい体質につながらないよう努力してまいりたい。

（明石会長）
　私立の場合は一般的に学校給食が無いので、担任の先生が食物アレルギーの研修をあまり受けていない。私立学校で夏や冬に海や山に行くと弁当を持ってくる。ある私立学校が黒姫山に行って救急車を呼んだとか。公立はそういう意味でしっかりしている。栄養教諭、栄養士にお願いして学内で注意を払っている。諸井委員がおっしゃったように、いじめ問題には私立や公立は関係ないので、いじめ問題や食物アレルギーという命に関することは差をつけないようにしてほしい。

（３）議事（３）いじめ問題の重大事態に関する再調査部会の運用について
　事務局から資料３に基づき説明し、委員からは質疑等はなかった。

（明石会長）
　これは粛々と行っていくことになる。もし異議なければ施行はいつからか。

（事務局）
　本来であれば再調査部会の設置が決まったときからこの規定はあるべきだったが、審議会において諮って定める形となっているので、御異議なければ本日から施行としたい。

（明石会長）
　異議なしでよろしいか。

（全委員）
　異議なし

（４）議事（４）地域における青少年の体験活動の促進に関する方策の検討について
　事務局から資料４－１から４－５及び参考資料に基づき説明し、委員から次のとおり質疑等があった。

（長田委員）

「いい子どもが育つ都道府県ランキング」（参考資料）で「地域の大人から褒められたことがありますか」が５位となっており地域の皆さんに育てていただいているのかなと思った。地域との連携の中には、まず学校と家庭があるが、７，８年前から新たに地域というのが入ってきた。地域でどう取り組むのかというのに慣れていなかったが、地域の方々が登下校の見守りなどでまず挨拶から始めて子供たちに関心を持っていただいている中でしっかりほめていただいて、そういった中で地域に育てていただいていると思う。大変感謝している。もう一つ、「学校で友達と会うのは楽しいと思いますか」が２位となっており、いじめの問題などあるが、埼玉で大きなことが起こっていないのはこの辺りのことからきているのではないか。楽しいという部分が無いと困るので、先生方に頑張っていただいているお陰だ思う。

（明石会長）

地域の大人たちは非常に子供に関心を持ってくれている。しかし、「今住んでいる地域の行事に参加していますか」は、全国からみると低く３９位となっている。埼玉県の子供たちはお祭りなどに参加していると思っていたが。

（長田委員）

おそらくお祭りは遊びに行くという感覚はあると思う。行っていないわけではないのではないか。祭りがあるので小遣いをもらって買いに行くとかグループで遊びに行くということは結構している。行事や子供会の形で参加するのは少ないかもしれない。

（明石会長）

「近所の人に会ったときは、挨拶をしていますか」が低く、子供たちの地域との関わりは少ない。「家の手伝いをしていますか」は８位となっている。学校は楽しくて家はいいけれど、どうも地域の空間は、大人は関心を持っているが、子供たちはいまいちかなという感じがこのデータから読み取れる。

（長田委員）

遊び場がなくなっている面もあるのではないか。家の中で遊ぶとか学校で遊ぶことが多く、昔みたいに空き地で遊ぶということが少ないため、放課後に地域の方の目に触れないという環境はあるかもしれない。

（明石会長）

もうひとつは、ボランティアに参加はしていないけれども、地域に対する関心はあるが、そのツールが無いということが課題としてあるのではないか。実際に周りの大人は関心を持っており、子供たちも何とかしたいと思っているけ

れども、結果はしていないということがデータから読み取れる。

（事務局）

体験活動はしたいけれどもどういうところに行けばそういったとっかかりがあるのか、教えてもらえるのかが分からないということがある。「いい子どもが育つ都道府県ランキング」の調査結果と県の調査結果とをからめて、ある程度その傾向を検証できるかもしれない。

（伊藤委員）

フランチャイズチェーン協会として加盟いただいているコンビニ５万店では、体験活動は積極的に受け入れをしている。小学生や中学生の体験学習を積極的に受け入れている中で、子供たちからは大変参考になったという声が圧倒的に高く、保護者や子供からお礼のお手紙を頂戴することも非常に多い状況である。これからも積極的に受け入れていこうという方向で協会内では意思疎通をしているところである。しかし、以前から申し上げているように、どこに話を持っていけばいいかという問題がある。体験学習を受け入れますよというお話を教育委員会に持っていったりしているが、個別に対応しているというところがあるので、どこに話していいのか複雑でお互いに意思疎通できないところがある。もう少し窓口を各県で一本化できればこういった取り組みはもっと進むと思う。我々も協力するのでぜひ整備を進めていただければと思う。

（中村委員）

県の調査結果を見て、川口でこのような調査をしていないので大変参考になる。私どもの方でも２年前くらいから広報等を通じて、国立青少年教育振興機構の体験活動の意義や自然体験、体験学習について市民に周知してきたところ、問い合わせ等が少し増えたので、この効果はあると思っている。私どもの方でも小学生に向けた体験活動というような事業はたくさん実施しているが、中学生に向けた事業はなかなかできていない。事業の中で小学生と中学生を対象に募集はしているが、中学生の参加がほとんどない状況である。これは部活や塾の影響があるのかと思っていたが、この調査結果を見たところ、そうではなく、体験活動をそもそも知らないということなので、その辺の周知の仕方についてもこれから検討していく必要があるということに気づけて大変参考になった。

（志賀委員）

「いい子どもが育つ都道府県ランキング」を見たときに、子育て中なのでとてもうれしく思った。特に生活習慣が上位を占めている。これは親が環境を整えないとできない部分もあるので親が熱心なのかなと思った。「学校で友達に会うのは楽しいと思いますか」、「友達が悪いことをしたときは注意しますか」、「友達に伝えたいことをうまく伝えることができますか」など、こういった真

面目な丁寧なコミュニケーション能力がちゃんと上位になっているので、とても家では子供はまじめで素直な子供らしい感じなのかなというイメージを持った。私は鴻巣なので、南部の端、行田と隣り合わせのところである。さきたま古墳など非常に近く、よく勾玉づくりに行っていた。うちの子供は小学校の頃そういった体験をしたことで伝統芸能などにも関心を持っていた。「埼玉県について誇りに思うこと・自慢にしたいこと」（資料４－３、Ｐ１５）の「祭り・伝統芸能」で、「北部・秩父」が小学校５８％中学校６１％となっており、やはり小鹿野町など秩父や北部の方は伝統芸能が活発なので子供たちも興味が高いのだなと感じた。うちの子は「郷土かるた」がきっかけで埼玉県の良さを知り郷土愛を持ち始めた。いまだに小鹿野町を車で通ったりするとかるたを読んでみたりなど全部覚えているので、郷土愛が定着するのにいいものだと思う。何かしら身近にそういった資料があったり参加することがあると子供は単純なので郷土愛を感じることもあるかと感じた。子育てをしている親としてはこのデータを見て嬉しいなと思った。

（久本委員）

最近言われている大学生が海外で勉強することとか、郷土愛とか祖国愛などの地元を愛することについてですが、大学が行っているいわゆるグローバル化を進めていく中で、将来的に多くの人に土地に根付いてもらった方がいいのか、そうではなくて、何％が海外で活躍するのがいいのか何％が地元に根付くのがいいのか、色々あっていいと思う。すべて地域に密着型ということではなくて、色々な人たちを育てていけばいいのではないか。教育は一様でパターン化しているが、実際の社会は個性のある人もいる。教育と実業界の間にギャップがあるのではないか。多様な人間を育てていくことが重要だと思う。

（明石会長）

意見が分かれると思うが、クロス集計（資料４－５）「大人になったらどこに住みたいか」の５つの回答区分（今住んでいる地域、東京都心、その他の国内の地域、外国、わからない）のうち、個人的には「その他の国内の地域に行きたい人」と、「わからない」人を心配している。今住んでいるところに住みたいもいいし、東京に憧れるのもいいだろう、外国にあこがれるのもいいだろうと思うが、問題は埼玉もいやだ、東京もいやだと、違う地域に行きたいという小学生が２２％もある。わからないという中学生が３３％もある。この辺りの子供たちの層が問題かなと思う。外国に住みたい人が１割いるということは健全かなと。クロス集計のデータはいいデータが出ている。分からないという人は、体験活動の募集を見たことがないという割合が高い。ほとんど中学生の場合、色々なことをしたいと思うけれど、どこでなにをやっているかというチャンネルを知らないという、情報が入ってこないということである。地域の情報から孤立化されると、分からないとなってしまう。判断のしようがないのだ

から仕方がない。その他の地域に行きたい人というのは、地域における声かけ、挨拶運動が少ないこと、国際交流活動の割合も少ないことがある。お互いの「おはよう」とか「こんにちは」という挨拶がないと、やっぱりどこかに行きたいとなってしまうと思う。今後埼玉県の健全育成の施策を策定する前に参考になる基礎データが出ているかと思う。

読書が好きな人が３５％と低いのが気になる。この部会でもいい本を選定しているが、どう考えるか。

（川島委員）

書店の立場としてはだいぶ低いと感じる。埼玉県は県の推奨図書とか推薦図書などがあり、読書の推進には色々手を尽くしてはいるが、なかなか本を読んでくれる子供が少ないと思う。私は行田市だが、夏休み推薦図書、冬休み推薦図書など、学校で直接チラシを配って注文してくださいと言うとかなり申し込んでくれる生徒が多いが、ただお店に買いにきてくださいと言うとやはり売れないのが現状である。もう少し書店も努力して小さい頃から子供さんに色々な本を読んでいただけるような教育ができているといじめ問題も少なくなっていくような気もする。「今住んでいる地域の行事に参加していますか」の関係ですが、行田市にはさきたま古墳群や有名な火祭りなどがある。埼玉県名発祥の地の埼玉中学校・埼玉小学校の子供たちは楽しんで一生懸命事前に打ち合わせしたり用意したりみんなで参加する。しかし、町中の方では見に行くだけでお祭りに参加しない。町の中も夏祭りがあって、山車を持っている地区とか神輿を持っている地区の子供は、山車に乗りたいとか神輿を担ぎたいという気持ちが心にあるので一生懸命参加するが、持っていないところはあまり興味がないのではと思う。

（諸井委員）

「いい子どもが育つ都道府県ランキング」で４位となり、一つ一つの設問から見えてくることはあると思うが、いい子とはそもそも何をもっていい子なのかが分からないし、これがトップになったからすごくいいのかというとよく分からないところがある。例えば１０年前と比べるといい子になっているのか、５０年前とはどうなのかなども考えないと、これだけ見て埼玉県が上の方だから良かったねということにはあまりならないのではないかという気がする。子育てなどについて予算委員会などで知事等とやり取りしているが、例えば埼玉県は児童虐待の通報数が１０年間で３倍ぐらい増えている。５，３５８件で、１０年前は１，８００件くらいだった。そういう中で本当にいい子どもが育っていると言ってしまっていいのかどうか。これは子供に訊いているアンケートだが、親がどういう風に変わってきているのかというところにアプローチが無いと子供の感想だけ聞いてこれがいい子どもだと判断してしまうとちょっと違うのかなと思う。

地域における青少年体験活動は、身近なところでは５月３０日に地域でごみゼロ運動を行ったが、開会式に行っても子供は全くおらず、親の世代もほぼいなかった。ほとんど私の親の世代（７０代から８０代）の方が農業の合間に出てきてやっている。周知の問題かもしれないが、参加したくない、めんどうくさい、自分に何もプラスにならない、という考え方の方が多いかと思う。子供たちに意欲はあり、運動をやりたい、野球、サッカーなどをやりたいけれど、親がやらせたくない、だからやる子供が減ってしまって、チーム数が減ってしまい、市内で大会をやってもいきなり準決勝になってしまうという状況も進んでいる。そういうことから考えると、スポーツ少年団や部活動をしている中で、親が土曜日の朝から弁当を作ったりグラウンドに送り迎えしたり試合会場に行ったりといったことがいやだと、めんどうくさいと、子供はやりたいけれど親はやらせたくない、親に負担が無いならやってもいい、そういう考え方になってきている。親が関わりたくないという中で、どうやって体験活動を促進していくのか、どう親に関わらせるのかということを考えなければならないのかなと思っている。こういった活動を促進するということは、いじめがなくなるとか社会性を持たせるとかニートや引きこもりを減らすとか、そういったことに非常に役に立つと思っているので、どのようにやっていくのか、個人的にはどこかで強制的なことがないと無理なのではないか、親に任せていると無理なのではないかと思っている。

（明石会長）

県の調査では保護者に訊いているが、３５～４３歳くらいの親たちの層をはっきり知れればと思う。その小中学生を抱えた保護者たちの行動とか態度が分かれば若干問題解決の糸口が見えそうな感じがしている。難しいかとは思うが。

（諸井委員）

体験活動をやると後で感謝するのだが。

（東谷委員）

体験活動の参加状況は、小学生が約７割、中学生が約４割となっており、参加しなかった理由としては、どんな活動があるのか知らなかったというのが多くの割合を占めているのを見ると、周知活動のやり方を考えなければならないのではと思う。体験活動の募集を知る手段としては、やはり学校で配られたチラシやお知らせなどだと、何枚もいっぱい子供に配られてもそんなにちゃんと見るとは思えないので、例えば、活動する団体の方が学校へ行ってデモンストレーションしていただくとか、パネルみたいなもので興味を惹くようなことをしていただければ、そういう体験をやるんだというのが目に見えて楽しそうだなと思ったりするのではないか。

もう一度参加したいと思わない子供の理由として、親に勧められたからとか

友達が一緒に参加するからとか、自分かやりたかったわけではないが参加したという割合が多いのかなと思う。どうしても参加するのに親と一緒じゃないといけないとか送り迎えしてもらわないといけないとか、一人では行けなくて友達が一緒じゃないといけないとかとなると、どうしても足かせになるのではないか。どちらかが行きたいところをやめなければならないともったいないと思う。一人でも参加できるような取組はあるのか。親が送り迎えやお弁当づくりをしなくても、友達が一緒に行ってくれなくても、それでも参加できるよというような取組があるともう少し参加し易くて、そこで友達ができればまた違うと思う。

（関根委員）

南部のわが市では、体験活動は小学校全校で毎週土曜日、月２回ほど、地域の皆さん方の協力で習字教室や漢字チャンピオン、スポーツチャンバラ、遊びの宝箱など、色々な体験をさせている。小学校で開催するため自分で歩いて来られる範囲なので、必ず大勢の参加者がいる。教室の広さの関係もあるので、２０名で募集したが、応募者が４０数名となり昨年は抽選で落してしまった。そうしたら、かなりのお母さまからぜひ受け入れてほしいという話があったので、今回は思い切って全員４６名を受け入れて第１回をスタートした。第１回は、父母も一緒に参加して体験活動の趣旨を説明し、これから色々な体験活動をやっていくということで遊びを通しての催し物をやらせてもらっている。他の地区でも習字の稽古など、母がやらせたくても子供がいやだという場合、母も一緒になって参加すると子供も最後には一緒に楽しんでやっているという話も聞く。小学校のうちは父母が一緒にちょっとついていただければ子供の関心も膨らんでいくのかなと思う。お母さん方には休みや用事のないときにはいつでも参加してくださいと申し上げている。

中学生の不良少年はだいぶ少なくなった。１０年ぐらい前に保護司をしていたときは、中学生、高校生を対象に７，８人が担当してやっていたこともあるが、今はほとんどいなくなってしまったので、反対に少し子供との接触をやってみたいなと思うようになってきた。中には問題のある子もいるが、子供たちの方が大人になってしまったのか、上手く逃げ回って悪さをして捕まるようなことはだんだんしなくなっている。パトロールで公園を見ていても、昔は年中何人か集まってうろうろしていたが、今はゲームを揃って座り込んでやっているような遊びで、これでいいのかなという話もある。

小学校の放課後居場所づくりというわが市の取組は、今６校でスタートしている。小学校の子供たちが５時まで遊んで宿題してということをやっている。５名くらいで受付を行い、だいたい登録してもらった人が参加している。平均４５名くらいだが、保護者会などがあるとどっと増える。この取組をやっていない地区のお母さん方は早くこちらの地区も進めてほしいという希望があり、市も一つずつ増やすよう頑張っている。

わが市には野火止用水があり、その用水路の掃除をある中学校の生徒会が中心になって始めたのが、市の全校に広まり、地域や町内会の方を含め、８月の第３土曜日の大清掃の日に小学校の子供たちが袋を持ってゴミや缶を集めた。野火止用水の近くの子は水の中に入って大騒ぎしながら自転車を引き上げたよとか楽しみながら体験活動をやっている。そういうことを含めると１０年前と比べ地域の方たちとの関わりが良くなってきているのかなと感じている。

（橋本委員）

学校現場で保護者の方に、子供のやる気を育てるにはどうしたらいいのかとよく聞かれる。この一連の調査結果を確認したときに、学校は楽しい、家でもそこそこ過ごしている、外に対する興味関心もそこそこ持っていることが分かる。もしかしたら埼玉の子たちは内弁慶、若干受け身的な、情報の収集力はあるけれどもそこから積極的に取り組んで何かやろうという行動力までは弱いのではと、現場の様子と保護者たちの思いと、この調査結果を照らし合わせながら考えていた。これから体験活動促進の取組の方向性のところで、意欲とか関心とかやる気はある程度持っているけれども、そこから一歩進んでやれるところまで育てるというのがとても大事であり、体験は色々な意味での育つ根底の力になりますよ、ということがちゃんと実証されているということや、その意義、仕組みを含めて、保護者にどんどん広報していくことが必要なのかなと思う。

保護者の巻き込みについて、今中学校現場でたくらんでいるのは、保護者もそれぞれいろんな経験・能力を持っていると思うので、その方たちに自分はこんなにすごいんだ、青春時代こんなに頑張ってきた、というような保護者たちの自分自慢と地域の体験活動のコラボをして保護者を巻き込んでいく取り組みを子供たちに向けてできれば、より近い感じで子供が取り組みやすくなるのではと思う。

（明石会長）

「参加した体験活動の種類」（資料４－３、Ｐ１２）について、中学生では男女差はないが、小学生の場合、女性の体験が少ないことが気になる。その他に性差はないが、ここだけが差が出ている。埼玉の小学生・中学生は東京に住みたいというタイプの方が多い。体験活動のことを考える場合にその辺りが気になっている。

（５）その他

（長田委員）

議事（３）については異論はないので質問はしなかったが、第４条第２項に「特別の利害関係を有すると認められる者は、再調査部会の委員になることは

できない。」とある。再調査部会の委員に県ＰＴＡ連合会会長が入っているが、どこまでが利害関係者なのか。ＰＴＡはそもそも利害関係者なので、仮にある市町村の学校で事案が起こった場合に、そこに所属しているメンバーがたまたま県のＰＴＡ会長になっている場合は利害関係者になるのかどうか。この再調査部会にはこの審議会の委員の中から入ることになっているが、利害関係者ということで保護者の代表が再調査部会の委員に入らないとなると、今度は保護者が知らないところで再調査が行われているということになるとまたややこしいのではと思ったが、どうか。

（事務局）

直接の人間関係や特別の利害関係がある方は、公平中立な調査を確保できないため除外するという考え方が国の基本方針でも定められている。特別の利害関係にＰＴＡの方がどの程度まで入るのかはまだ想定できないが、個別事案が生じたときの対応になるかと思う。ただ、重大事態が起きたときに、今想定している再調査部会５名のうちどなたかが利害関係を有するために再調査に参画できない場合が起こったときは、審議会の委員を新たに委嘱し、その方に再調査部会のメンバーに入っていただくことを考えている。当初考えているような各分野において知見を有する方、専門性を有する方においてこそ調査審議の公平性中立性を確保できると考えているので、委員を新たに任命して対応することを考えている。

（事務局）

県が扱う重大事態の処理案件は、県立学校と私立学校についてである。基本的に小中学校のＰＴＡを代表する方と伺っているので、直接御指摘のような利害関係が生ずることはないと判断している。

（東谷委員）

事例が起きてからの判断になるのではないか。直接の人間関係と同等に当たるくらいの利害関係となるのではないか。

（事務局）

合議体の中立性を保つためによく法律などで見られるのは、たいてい特別の利害関係という言い方をしている。いじめ事案の調査に関しては、人間関係と利害関係の両方を入れている。やはり、いじめの問題は密接な人間関係の中から起こりうるため、まず直接の人間関係がある方を除外しましょう、それ以外に、公平中立な判断ができない利害関係者として、学校や当事者間の保護者の方との利害関係者を含めて除外する形となるかと考えている。個別具体のケースをみて、直接の人間関係なのか特別の利害関係がある方なのかを判断させていただくことになろうかと思う。